

# 廃品回収業に生きる人々

— グローバル都市と野宿者 —

弘前大学 山口 恵子

## 一 はじめに

一九九〇年代以降、グローバル都市・東京では、目に見える「貧困」が大きく社会問題化された。「ホームレスの実態に関する全国調査」によると、二〇〇三年、日本全国で二五、二九六人の「ホームレス」が確認された。都道府県別でもっとも多いのは大阪府で七、七五七人、次に東京都六、三六一人、愛知県二、一二一人、神奈川県一、九二八人となっている(1)。ここ数年は地方都市での野宿者の増加が指摘されているけれども、やはり東京で野宿する人々の数は大阪とともにぬきんでている。

本稿では、東京で野宿する人々が、現在従事している仕事に焦点をあてる。野宿状態にある人々は生き抜くためにさまざまな生業をおこなっている。なかでもより多くの人々が従事している廃品回収業(資源回収業)を例

にとり、それがどのように現代都市のなかで営まれているのか、その諸相を記述する。これによって、グローバル都市・東京において都市下層がどのように位置づけ、また位置づけられているのか、明らかにする(2)。なお、ここでいう野宿者とは、一時的または恒常的に屋外で野宿状態にある人々を指している。

以下では、まず、東京で野宿者がどのような状況にあるのか概観し、次に彼／彼女らが現在行っている仕事について、バリエーションや選択の傾向を示す。そのうえで、とりわけ本やアルミ缶などの廃品回収を中心としたリサイクル業が、どのように都市において展開されているのか、そして野宿者がどのように関わっているのか、具体的に明らかにしていく。

## 二 東京の野宿者の概況

多くの人々にとってそうであったように、野宿する人々にとっても、日本の首都・東京はその都市形成期より、生活の場としてあった。とりわけ大きな盛り場や駅、「寄せ場」の周辺では、野宿をしたり、仕事に励む彼／彼女らの姿があった。しかし一九九〇年代に入り、目に見

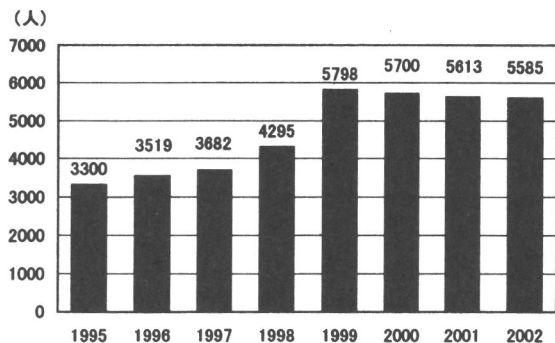


図1 東京23区の野宿者数の推移 (出典) 東京都調べ

える野宿者の増加は「新しい都市問題」として社会問題化されていく。

具体的な数値の推移について、最小限の数字であることはいうまでもないが、図1が参考になる。図1は東京都が行った二三区内の「路上生活者」の概数調査の結果である(3)。一九九五年には三、三〇〇人が確認されてお

り、一九九九年以降はいっそう増加していることが分かる。その後、一九九九年をピークに少しずつ減少しているようにみえるけれども、これは野宿者のための施設がこのころから急激に増加してきたことが影響していると考えられる(4)。日本経済が極度の長期不況下にあることを考えると、今後その数が減ることは考えられない。

では、人々は都内のどこに野宿をしているのだろうか。同じく東京都の二〇〇二年の概数調査によると、二三区内では、公園三、七五〇、河川八五〇、道路七五〇、駅一五〇、その他一〇〇という結果が出ており、公園が圧倒的に多い。区ごとに見ると、すべての区において野宿者がカウントされているが、とりわけ二三区東部の台東区・墨田区と、二三区西部の新宿区・渋谷区に、その数は集中している。

例えば、二〇〇〇年に支援団体が行った調査によると、こちらはより実態に近い数であると思われるが、二三区東部を流れる隅田川の川べり六キロと、そこに隣接する小公園に九三七軒、近くの東京有数の都立公園である上野公園(五三・一ヘクタール)に二八二軒の「仮小屋」が確認されている(5)。そこでは、ベニア板や木切れを用いて枠組みを作り、それに雨よけのブルーシートを被せるなどして頑丈な小屋が多く作られている。窓やドア、

なかにはネコ用出入り口が備え付けられたりした小屋は、まさに「ハウス」である。また、キャンプ用のテントを建てる、植え込みの木を利用してブルーシートをテントのように張った家もある。このように基本的に昼夜を問わず住まいを維持できる、いわば「常設」タイプの居住形態は、ますます増える傾向にある(6)。

二三区西部の新宿区とその周辺では、支援団体の概数調査によると、一、四一九人の野宿者がカウントされている。たとえば、そのなかでも新宿駅で確認された三一〇人は、ほとんどがより流動的な「非定住層」である(7)。新宿駅は、乗降客数が日本で一番多く、毎日約六万人の人々がこの駅を利用する。駅周辺には地下道が張り巡らされており、デパートなどの商業施設が密集している。客の往来が比較的少なくなり、店が閉まり始めるおおよそ九時以降になると、この巨大な地下道やビルのたもとへ、三々五々、野宿をする人々が集まりはじめる。彼／彼女らは段ボールなどを用いて簡単な家を作ってその中で寝、朝になるとそれを畳む。また、毛布や寝袋および新聞など簡単な手持ちの敷物を広げて早朝まで眠る。この新宿駅の地下街は一九九四年ごろから行政・警察による野宿者の強制排除とそれへの抵抗運動が大きくクローズ・アップされ、東京都で野宿者が社会問題化される大

きな契機になった場所である。

いうまでもなく、野宿する人々は多くの困難のなかにある。まず、絶えず飢餓にみまわれている。後述するように現金を得るような仕事についている人もいるが、金額は限られており、不安定でもある。よって人々は各支援団体の「炊き出し」を利用したり、飲食店やコンビニエンスストアの残り物を集める「エサトリ」を行ったりして、飢えをしのぐ。家賃を払って家を確保することなど、とうてい困難である。加えて、どこに行っても絶えず空間から追いたてられることになり、とりわけ近年では、若者による集団での襲撃が相次ぎ、いつそう安全がおよびやかされる状況にある。

このような極度に困窮する人々の増加に対して、さまざまなプロセスをへて、二〇〇二年には「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が成立する。東京において野宿者を対象とした総合的な「自立支援」の事業は始まったばかりである。

### 三 野宿者と仕事

野宿者が行っている仕事について

我々が雇われて仕事をする場合には、何らかの自己証明をすることを求められる。それは、履歴書や身分証の

提示という形をとることが多く、少なくとも住所や連絡先が問われる場合がほとんどである。また仕事に耐える体の健康状態も求められよう。しかし、野宿の状態にあるということとは、まずもって住所や連絡先が示せないということである。そして履歴書や身分証も出せなくなる場合が多い。さらに、野宿する人々には「なまけもん」などの強い偏見が伴う。

こうして、野宿状態にあると仕事は著しく限定される。東京の野宿者七〇人を対象に行われた聞き取り調査によると、対象者の

表1 現在、現金収入を得る仕事（複数回答）

	西部*1	東部*2	その他*3	計
建設日雇	60	44	38	142
運輸日雇	14	12	11	37
その他日雇	4	12	10	26
特別清掃事業	1	17	0	18
チケット並び	40	17	20	77
廃品回収*4	6	31	27	64
本集め	35	8	9	52
サンドイッチマン	3	0	1	4
屋台手伝い	1	1	1	3
その他	12	3	0	15
計	178	145	117	438
該当票数	138	113	100	351

- 注) \*1 西部とは新宿駅、池袋駅、渋谷駅周辺と付近の公園を含む  
 \*2 東部とは上野駅・公園周辺と隅田川、山谷地域を含む  
 \*3 その他は日比谷付近、多摩川付近中心  
 \*4 ここでは「廃品回収」と「本集め」が分けられているが、本稿では後者は前者に含めて扱う

出典) 都市生活研究会、2000、「平成11年度路上生活者実態調査」巻末統計票p.15より作成

約半数にあたる三五一人が現金収入のある仕事についていると答えている(8)。その種類については表1のとおりである。

野宿をしている人々が現金を得るために行う仕事は、大きくふたつに分けることができよう。ひとつは、いわゆる一日契約にて雇われて働く「日雇」の仕事である。表1からは、四三八の回答のうち、建設の日雇が一四二と群を抜いて多いことが分かる。この建設業の日雇労働について、東京では、「山谷」と「高田馬場」という二つの大きな日雇労働市場である「寄せ場」ではもちろんのこと、その他主要駅や公園などでも仕事の手配が歴史的に行われてきた。現在では、不況や公共事業の削減、産業の構造転換などにより、建設日雇の仕事は極度に冷え込んでいく。よって、野宿状態にある人々で日雇の仕事に毎日就くことができるのは、現役層のごく一握りにすぎない。圧倒的多数は、仕事があれば行く、飯場労働などの極度の悪条件を耐えて働く、などである。

ふたつは日雇などの雇われの仕事以外で、現金を得るためになされる雑多な生業がある。表1からは、東京で野宿をしている人々が多く行っているこのような雑業が分かる。つまり、チケットの「並び」（野球やコンサートなどのチケットを手に入れるために列に並ぶ仕事）、廃品

回収（空き缶、銅線、廃品のテレビやビデオなどの電化製品、段ボール、その他を集める）、本集め（捨てられた雑誌や本を集める）などである。その他、数は少ないがサンドイッチマン（いわゆる看板持ちで、店の宣伝のプラカードを持って立ち続ける）、屋台手伝い（露店商の手伝い）などもみてとれる。さらに、ここには名称としてはあがっていないが、地見屋（道などに落ちている金目のものを探して回る）、銀杏集め（季節によるが銀杏を拾って売る）などの仕事も存在する。

雑業の特徴としては、第一に、参入が比較的容易で、収入や仕事の条件などに関して国家による規制が少ないことがあげられる。例えば、年齢制限がなく、履歴書などももちろんいらぬ。税金もとられなければ、労働基準法などの法律の適用も受けない。第二に、しかしこのような雑業は、極度に実入りが少ないなど条件が悪い。例えば、ある野宿者の二〇〇一年二月二七日のアルミ缶集めの成果は、やまない小雨のなか、夕方六時から早朝まで台車を押して歩きどおしの一一時間、集まったのは約二五キロで、相場では二、〇〇〇円に届かない。さらに、作業は他人が捨てたものをゴミ箱や回収カゴなどから拾い上げるものであり、汚かったり臭かったり、見栄えが悪かったりするものである。これは見方をかえると、

彼／彼女らが極度の貧困にあるなかで、少しでも現金を得るためにと悪条件をおして働かざるをえない状況を、業者がうまく利用しているという見方もできる。第三に、社会状況にあわせて、雑業の仕事自体に流行り廃りがあるなど流動性が高い。現在はアルミ缶集めと本集めに従事する人が多いけれども、それ以前にはテレホンカード集めが流行っていた時期もあった。使用済みのテレホンカードを集める仕事は、九五年以前には一枚あたりの買い取り値段が三〇円〜三五円と高い時期もあり、今より多くの人が行っていた。しかし九六年時には一二円前後になっており、かつ携帯電話の普及で人々がテレホンカードを使う機会もめっきり減ったので、集める人はほぼいなくなつた。第四に、これらの雑業は都市に特徴的なものである。例えば、廃品回収業では、人口の集積した東京の電車では読み捨てられる雑誌の量もケタが違い、またそれを買う人も引きも切らないので、そのまま大量の焼却ゴミになるはずのものが再度商品として流通するのである。

#### 仕事を行うパターン

このような日雇や雑業の仕事を、野宿者はどのようなパターンで行っているのだろうか。やや煩雑になつてし

まうけれども、現在の収入を得る方法について、調査の回答をそのままあげてみたい。以下、対象者の回答ごとに鍵括弧でくくられている。

「日雇週一〜二回、土方」「月三回の仕事で月三五〇〇〇円、左官・土方」「大工」「水道管の配管工事をやってる」「日通で引越し」「あつたら飯場」「たまに現金」「白手帳で月四回」「都の仕事(草刈) 半日一万円、月二回、「ビル清掃など月に約四日(土日)」「アルバイトとして地下鉄における片づけ、荷物運び、土木作業など」「教会の炊き出し、週に一回ぐらい土工の仕事」「引越しの仕事に行く、友達にもらう」「一週間に二回は土工や引越しの仕事に行っている、炊き出しに並ぶ」「寝場所の近くの露店の手伝いで数百円ずつ」「テキヤの掃除、屋台のばらし一日四千〜五千円飯つき」「露店(たこやき) 歩合制、正月は九千円〜一万円になる」「夏には並び(野球のチケット) 徹夜で三千円」「ダンボール集め」「古新聞収集キロ三円ぐらい。飯食ってなくなる」「看板もち、ピラまき、紙類の仕事が主」「雑誌拾い最低価格三〇〜五〇円、一回約三千円、週に二〜三回」「雑誌等の回収一キロ三円、一日一五〇〇円くらいになる」「雑誌拾い一冊五〇円、二〇冊集めて飯代にする」「古本集め一日五〇〇〜八〇〇円」「本集め一日三六〇円〜四六〇円」「月二〜三回週刊誌集めで一日二千元、建設日雇い」

「アルミ缶一キロ四〇〇円、一週間で八一〇円〜九三〇円」「アルミ缶集め一キロ六五円、電気製品(テレビ一台千円)、釜類一キロ六五円、赤線(銅線) 一キロ一四五円」「ごみ収集(アルミ缶やダンボール) 一日五〇〇円くらい」「缶集め(煙草錢程度)」「アルミ缶集め、エサトリ」「ぎんなんとって一キロ四〇〇〜五〇〇円で業者に売る」「炊き出しのみ」「炊き出し、コンビニ期限切れ」「炊き出し、福祉のパン」「あちこちの炊き出しと残飯」「炊き出し、たまに土工で仕事に行く」「エサトリはしている、友達から時どき五〇〇円もらっている」「食事は炊き出し、煙草は友人から」「昔の友達に時どき煙草錢(千〜二千元)を借りる」「年金を月四万もらっている」(9)。

若干の例外はあるものの、日雇系の仕事をあげるケースと雑業系の仕事をあげるケースとに分かれる傾向があることがみてとれる。ふだんは雑業をやっている、日雇の仕事があれば行くという人は少なくないが、現実的には日雇の仕事で現金を手にすることができる人々とは、雑業をメインに行う人々とに分かれてくる。最も多いのは、日雇の仕事につく機会がだんだんと減り、その分を雑業で補うようになるというものである。

ただし、日雇の仕事があれば、皆それに従事するとは言い難い側面もある。例えば、野宿する人々が集まって

いるところには時に仕事を斡旋する「手配師」がやってきて仕事に誘うことがある。ほとんどが飯場に泊まってくる建築・土木等の仕事である。しかし、「手配師から声かかるけど、ヌキ四、〇〇〇円（食事代や宿泊代もろもろ引いた手取額）とかじゃ行かないよ。土方やったこともないし」<sup>(10)</sup>という話からもわかるように、仕事は重労働でも低賃金を提示されることが多い。しかも手配師に誘われていったら賃金を払わない飯場だった、暴力をふるわれたなどの報告も少なくない。管理されて重労働、ましてや賃金がもらえないかもしれないというリスクを冒すよりも、体調にあわせて自由にできる雑業の方が選ばれたとしても不思議ではない。とくに野宿状態になつてから日が浅く、建設日雇などの重労働で働いたことがない人々などは、たとえそのような仕事につくチャンスがあったとしても躊躇するものである。さらに、テントや仮小屋などを作って比較的落ち着いて住んでいる層は、その居場所を放り出してまで期限のある仕事には行きにくい。このように現在の生活条件やこれまでの経験によって仕事が変わる側面もある。

#### 四 野宿者と廃品回収業

##### 東京における廃品回収業と都市下層

本稿では、この雑業のなかでも、現在、東京の野宿者にとって主な収入源となつている廃品回収業、とりわけ古雑誌とアルミ缶の収集・売買に焦点をあててみたい。

大都市での活発な生産・消費活動は大量の廃棄物を生み、それへの対応は絶えず都市社会の宿命としてある。東京では、明治・大正期には廃棄物の中の有価物を回収する業者が成立し、活発な活動を行っていた。第二次世界大戦のころは物資が不足し、廃棄物は極端に減少したけれども、その後の高度成長期の大量生産・大量消費を背景として、一九七一年には「ごみ戦争」が宣言されるなど廃棄物問題が深刻な社会問題となり、東京都は集団回収の支援強化など数々の対策を打ち出した。またリサイクル活動は住民運動の一環としても活発化した。そして一九九〇年代、日本では「循環型社会」をめざす動きが活発化し、二〇〇〇年には「循環型社会形成推進基本法」が制定された。東京都でも二〇〇二年には直面する緊急課題の解決と「循環型社会」への変革を進めるために「東京都廃棄物処理計画」を策定し、いつその取り組み推進をうたっている<sup>(11)</sup>。

このような廃棄物処理の歴史において、廃品回収の業者や集団は大きな役割を果たしてきた。そして、それは長い歴史を持つて、主に都市下層の人々の仕事としてあ

った。さかのほれば、昭和二二年に東京都社会局の行った「浮浪者」を対象とした調査でも、「バタヤ」家業が頻繁にとりあげられる。「バタヤ」は「掘り屋」「拾い屋」「買い屋」に大きく分けられ、「掘り屋」は「焼け跡や川の中などを捜すヨナゲ」、「拾い屋」は「車を曳いて歩くもの、バタ籠を背負って歩くもの、拾った果物等を背負って歩くか又は籠のないもの」、「買い屋」は「車の他に秤を用意しデモ（買入れ資金）を持つもの」である<sup>(12)</sup>。現代に至ってはそれをなりわいにする人々の割合そのものは減少したとはいえ、廃棄物の処理システムの中で回収業者・集団は一部自治体との連携を持ちつつ、活発な活動を行っている。

このような背景を念頭におきつつ、以下では、現代社会における古雑誌とアルミ缶の収集・売買について、野宿する人々のかかわりを中心にみていこう。

### 本の収集・売買

いうまでもなく、古本を集め、買い取り、売るという事業は歴史的に長く存在しており、今日では大型リサイクル書店も隆盛である。東京都内には「神保町」や「早稲田」などのように古書店が集中し、全国的に著名な地区もある。しかし、野宿する人々が集める本の主力は、

既存の古本屋ではあまり扱われない、週刊の漫画雑誌（「マンガ本」）や週刊誌（「記事モノ」）である。これらを収集・売買する場所やルートも、既存店とは大きく異なっている。

収集ルートとしては、地域の資源回収の日にまわったり、コンビニエンスストアや街のゴミ箱をまわったりということもある。しかし、現在もっとも多くの人がとっている方法は電車を利用するものである。電車の網棚やイスに放り投げられた雑誌や本を集めたり、駅に設置されているゴミ箱をひとつひとつみて、捨てられた雑誌や本を集める。東京の何百万人という人の流れのなかで雑誌は次々と捨てられており、それを集める時間帯は電車の混む早朝がもっとも効率が良い。本は汚れていない、破れていないなど、ある程度は商品としての見栄えがないと業者に買い取ってもらえない。また、最もよく客が買っていく週刊誌・週刊の漫画雑誌などは鮮度が重要であり、販売業者の買い取りは基本的にその雑誌の発行当日か遅くて翌日までのものに限られる場合が多い<sup>(13)</sup>。

集め方は、ひたすら一人で駅から駅へと集めてまわるもの、一人で一箇所の駅にずっといるものもある。また、グループで役割分担をして集めるもの、例えばゴミ箱から拾い出す役割とその拾い出したものを集めてまわる役



割で分担して、合理的に集めるものなどもある。そのとき、以下のように「なじみ」があれば、より効率的に集めることができる。

雑誌集めの途中、突然、上下そろいの駅の掃除の制服を着た、まだあどけなさの残る顔の男性が、小さいビニール袋を山下さんに差し出した。すすっと近づき、さっと渡して、にっこりしながら何やら山下さんの耳元でささやいて離れていた。みるとビニール袋の中は、「ジャンプ」が七、八冊入っていた。このすぐ後、この男性が床にしゃがみこんで、ゴミ箱を開け、雑誌だけ集めているのを目撃。どうやらプラットフォームの掃除のついでにたまたま本をみつけたから、というわけではなく、確信的に雑誌を集めているようだ。「時どき、こうやってもらうこともあるんだ。でも彼らは駅の人に見つかったらクビだよ。仕事外のことやってるんだから。だからときには俺もジューズぐらいおごってるよ」と山下さんは説明してくれた。最後、本をお金に換金して帰り際、山下さんは「あの人にもらった分が、今日は多かったなあ」と、あらためてこの掃除の男性への感謝を口にしていた<sup>(14)</sup>。

こうして集められた本を現金化する場所としては、まず、営業許可を持つ店舗をもち、誰でも分け隔てなく買

い取りをするリサイクルの店や古本屋があげられる。例えばYショップは高層ビル街の谷間にあった。

朝七時二〇分、本拾いのため、私と私の友人の北君と山下さんは歩き出した。途中、「ここが買い取ってくれるんだ」と、巨大超高層ビル群のふもと、巨大電化製品店や飲食店のひしめく一角を歩いているときに山下さんが指をさす。つい見逃してしまいそうな一畳ぐらいの狭い間口。こんなところで雑誌を買う人がいるのかなあと不安になる。その店のねずみ色のシャッターはまだ下りたまま。しかしよくみると、その上にはA4版の白い紙が張つてある。そこには「買取」の文字とともに、雑誌の名前が八、九種類並んでいた。その日は結局、別の所で買い取りになった。気になったので、山下さんと別れてから北君と一緒に再びこの店の様子を伺いに行った。とたんに耳に入る、大きな声。店員が景気良くまくしたてる。「一〇〇円だよ、一〇〇円、一〇〇円!……はもう数がないよ!」次々に立ち寄るスーツを着た人々。通りに面した店先には、「一〇〇円」とくつきりとかかれたプレートとともに、平積み週刊誌や漫画がうず高く並べられている。店の奥は中古のCDやゲームソフトが並んでいて、若者が時おり店に入っていく。まさに飛ぶように売れていた。本の向こう側で別の店員が手元で本の売れた数を「正」でつけていた。おび

ただし「正」が並んでいた(15)。

私と山下さんは、しとしと落ちる雨のなか、片手に傘、もう片方に雑誌のぎつしり詰まったペーパーバックを濡らさないように持ち、中古CD店に向かう。店先で店員に声をかける。店員はすぐさま手際よく冊数を数え、すらすらと領収書を書いた。山下さんもさっさとそれにサインをして、金を受け取った。私たちが集めた本はその場で店先の平積みの上に重ねられて、商品となった。誰が足を止めるでもなく、あつという間だった。今日の山下さんの稼ぎは四、五〇〇円。ライオンのように髪をポリリュームアップした若い店員の顔色をうかがいながら、話を聞いてみる。「一日二〇〇、〇〇〇つてとどこですかね。二、〇〇〇冊。そのうち人件費とか引いたら、まあ、こんなもんですよ。こうやっておじさんたちに集めてもらってねえ。私が来て半年ぐらいで、その前に一年ぐらいやってるから、ここ二年つてとどこでしょうか。」(16)

Yショップでは、誰であろうと商品になる本を持ち込めばすぐお金と引き換えて終わり、というすばやい売買が行われていた。しかし、人通りの多い新宿駅の近くに店舗を構えるこの店は例外的で、週刊誌や週刊の漫画雑誌を買って売る既存の古本店はけつして多くはない。現金化するためによく利用されているのは、路上で

「非合法」に一冊一〇〇円で雑誌等売る露店である。このような露店では、毎回本を集めて持ち込む人がほぼ決まっており、都合よく露店を変えることは嫌われている。次の事例の浜本さんは、新宿で野宿をはじめてすぐに本集めのグループに入り、雑誌の「拾い」をやったり市ヶ谷にある露店の店番をまかされたりしていた。

以前から疑問だったことを聞いてみた。「市ヶ谷のとときは、仲間以外の方が本を持ってきても買ってあげてた？それとも仲間だけしか買わないとかつていうのがあった？」浜本さん曰く、「ああ、中には顔でやつてただけど、いちげんさんはお断り出してたよ。まあ、今日持つてきて、明日持つてこないつていうのは、世の中に反するからね。だから集める仲間もほとんど同じとこだよ、持つてくの。毎日おんなじところもつてくんだよ。そうじゃないと、常識は常識だからね。決まってるんだよ。なんだおまえ、今日初めてじゃないかー、だめだーとか言われる。ほかへ持つてけーとか。やつぱ常識つていうのがあるじゃない、そういう世界でも。」(17)

また、この市ヶ谷の露店もしかり、多くの店はいわゆるヤクザがシノギの一部として開いていることが多い。しかし、新宿では野宿者自身が取り仕切つて店を開いて

いるところがいくつかあった。

駅の改札のすぐそばの壁際、ひざぐらいまでの高さの台が一畳分ぐらい置かれている。その上に、びっしりと雑誌が種類ごとに積まれている。壁を背にしてどっしりと丸イスに座り、珍しく親分のじよっちゃんが店番をしていた。他にも今日は、よく一人ででも店番をしているにこやかな顔のおじさんと、まだ店番を始めて日の浅い、若い小太郎さんも働いている。小太郎さんは乱雑になった本をそろえ直したり、数が残り少なくなった雑誌については、向かいの壁際に作られた段ボールで囲った本の置き場から補充したりと、休む暇なく立ち回っている。「おい、小太郎、きれいな本を上に乗くんだ」と、じよっちゃんは小太郎さんを、半分からかうように、いろいろと指示を出している。にこやかなおじさんは、紙袋を下げたおじさんが店に近づいてくると、慣れた手つきですぐさま向かいの本置き場の方に誘導し、すみっこで本のやりとりをしている。本を集めて売りに来た人に対応しているのだ。主には男性の客が次々に立ち寄り、ひと目で本を手に取り、一〇〇円のワンコインをじよっちゃんの手のひらにさつと渡して、立ち去っていく。じよっちゃんは四方から差し出されるコインにテキパキと反応する。客の合間を縫って、横から話しを聞く。「雑誌集めるの、東京で一、〇〇〇人ぐらい

いるって。吉祥寺や渋谷とかにも結構あるだろう。新宿周辺で七つある。うちで一〇人ぐらい使ってるよ。でも常時来るのは四、五人かな。いろいろあるけど平均して(買取りは)一冊三〇〇円。でも三、四冊しか持ってこなくても、持ってきたら一〇〇円や二〇〇円はたくさんやってるよ。あいつら酒が飲めればいいんだからさ。このごろ本が減ったよ。みんな捨てなくなっちゃってね。みんなこんなもん家に持って帰るんだもん。でもまた良くなると思うけどね。一日の最高は七〇、〇〇〇。ここは……組のシマなんだよ。こんなところでやったら、なめられてるって思うよな、そりゃあ。いろいろされてるんだ。でも……組は力弱いからね、他のとこに頼んでる。金払ってるよ。こうやって座っているとラクそうに見えるかも知れないけど、やくざだ、警察だ、つて大変なんだから、ほんつとに。」(18)

この店は、目と鼻の先で野宿をしているじよっちゃんが全面的に取りしきり、ヤクザや警察への対応にもあたっていた。そして彼が信頼が置けると見込んだ他の野宿者が、二、三人で店番をやっていた。というのも、例えばここで出てきた小太郎さんは、その後信頼を得て、お金の管理を含めて店番を全面的にまかされた。そしてほとんどなくして、店の売り上げなどもろもろ一〇〇、〇〇〇

円をそっくり持って姿を消した。じよっちゃんは「あいっ探してくれよー。見かけなかったか？」と齒軋りしていた。そのようなことを警戒して、店番をするのは親しい人になってくる。それをまかされると買い取りから接客まで多忙であるが、小額のお金がきちんと払われる。本を集めて持ってくる人は、店番とは一線を画されており、しかしやはり顔ぶれはだいたい決まっていた。

このような露店が新宿には比較的多く存在していた。店の売り上げは人通りの多さが勝負であり、改札から屋外に出る境目や、地下街から階段を上り終えた地上出口のすぐわき、駅に向かう大通り、盛り場の大通りなど、人通りの絶えない場所にある。先の表からも分かるように、本集めをする野宿者が東京西部で圧倒的に多いのは、新宿周辺でこのような本を買い取って売る店が多いことが影響していると考えられる。こうして週刊漫画雑誌・週刊誌は、野宿者によって収集され、主には露店の店を通して売買され、再利用されていた。

アルミ缶の収集・売買

以上のような古雑誌の流通に対して、アルミ缶がリサイクルされるルートはより複雑である。図2は一九九二年段階での都内のアルミ缶の流通ルートと流通量の概要

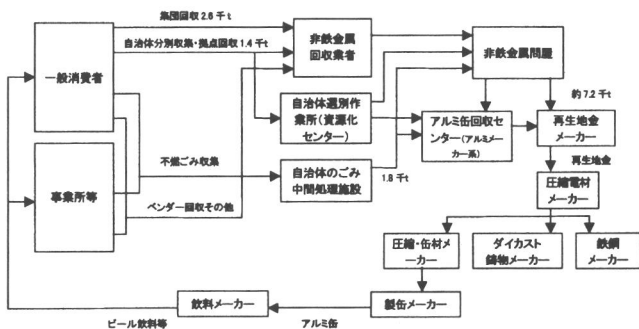


図2 都内のアルミ缶の流通ルートと流通量 (1992年)

出典) 東京都清掃局、1994、「資源回収業者育成・支援策調査報告書」p.9より一部訂正して再作図

を示している。そのルートは、まず、一般消費者から出された缶は、自治体によって資源ゴミとして分別回収および拠点回収されたり、消費者自身によって集団回収（町会、ボランティア、学校等）が行われる。一般事業所

のものは主にベンダー回収・その他が行われる。集められた缶は回収業者や問屋をへて、再生地金メーカー等に渡り、溶解、それぞれ再製品化される。この過程でのアルミ缶回収の全体総量は不明であるが、少なくともこの時点で、アルミ缶を扱う回収業界としての総回収量は七二、〇〇〇トンと推計されている(19)。また、

こうして都内でアルミ缶を含む非鉄金属を取り扱う業者として二九四社が報告されている<sup>(20)</sup>。

このような流通ルートにおいて、野宿する人々が行う収集・分別の方法についてみてみよう。アルミ缶の収集方法は、ターゲットによって大きく分けてふたつある。ひとつは、本来ならばベンダーが回収する予定の、街なかにある自動販売機の横についている缶専用のゴミ箱や一般のゴミ箱を回って集めるやり方がある。この方法では、曜日や昼夜に関係なく集めることができる。しかしゴミ箱のふたを一つ一つ開ける必要もあり、手間がかかる。また街なかの自動販売機にはアルミ缶の主力であるアルコール類の缶が少ないので、収集量に限界がある。よって、より多くの人が行っているのは、住民が缶を分別して捨てる資源ゴミの日に地域をまわって集める方法である。住民が回収カゴに缶を捨てるのをみはからって、夜間および早朝、つまり回収車が巡回して缶を回収してしまうまでの間にカゴを回り、スチール缶も混ぜているなかから、アルミ缶のみを抜き取って集めるのである。また、マンションやアパートなど集合住宅の廃棄物保管所もまとまった量の缶があり、一度に多く収集できる。その集め方には、自転車を使って集める人と、台車・リヤカー・旅行等に持つていく車輪のついたショッピング

バック等を引つ張り、歩き回って集める人に大きく分けることができるだろう。

いっちゃん横一メートル縦一・五メートルから二メートルくらいの、頑丈な台車を押して歩き始めた。けっこう早足で、ときに私は小走り。カーブも上手に曲がって、ぐんぐん進んでいく。歩道と車道を区切る白い線の外側にびったりそって、ごろごろごろごろカラカラカラと音をたてながら。

あたりが薄暗くなるなかでも、赤と白の縞模様のカゴが二つ、また場所によっては三つ四つそろえて並べてあるのは分かる。多くはビンとカンを分けて捨てるようになって通りの端に等間隔に並んだカゴは、側面の下の方はあみ状になっているので、うっすら中の様子が見える。いっちゃんは台車を押して歩きながら、すばやくスチールとアルミの缶を一瞬にして見分けているらしい。ほとんど止まらずにちらちらとカゴを遠目にみて進んでいく。やや広い道の片側を歩いているので、「反対側はいいんですか？戻ってくるの？」ときくと「いいよ、ちゃんとみますから。」どうやら缶のテカリ具合い、つまりスチール缶は底などが透き通っているのに対して、アルミ缶はテカリが鈍い。それと銘柄ですぐ判断がつくようだ。いっちゃんは缶が固まってあつても、決してがら

がらがらと無造作に自分のビニール袋に放り込んでいかない。片手に一個か二個そつとつかんで、袋にそつと落とす。それをくりかえす。うるさい音をたてることには気を配っている。「時間帯があるんですよ。メシ食って片づけと一緒にさあ出そうかっていうとき。今はちょうどそれが一段落したところだから、これからしばらくは出ないよ。あとは寝る前ね。寝る前に出そうっていうことになる。」

ふと、自転車で缶を集めている人といっちゃん長話をはじめ。この自転車がすごい。荷台にハップオスチロールのような人幅よりはるかに大きい箱を二つ積み、さらにその上にふくらんだビニール袋を載せ、乗っている人の上半身を超えている。とてもうしろは見えそうもない。それに横に袋をまたくりつけている。転びそうな大きさだが、結構バランスは取れているのだと思う。やや長髪の帽子をかぶったおじさん。いっちゃんは延々としゃべっていた。「知ってる人ですか?」「はい、近くの人。俺のほかにも今日は向こうで二人くらい(缶集めを)やってるって。」<sup>(2)</sup>

集めたアルミ缶はそのままではかさばるため、多くの人はそれをつぶす作業を行う。なかには専門の道具を持つている人もいるけれども、多くの人は一つずつ足で踏んでつぶし、一抱えもある巨大なビニール袋に詰め込む。

これも時間と場所が必要になる。東京東部の隅田川周辺のより定着的に住む層は、一応の場所を確保しているので、缶をつぶす作業をしたり、かさばる缶を保管することができ。

こうして集めたアルミ缶を現金化するのであるが、その形態から、現在都内で野宿する人々が取る方法は大きく二つに分けられる。ひとつめは、近辺の事業所に直接持ち込むことである。例えば、S商会は川のほとりで、三〇年以上前から廃棄物再生事業所を営んでいる。取り扱いは、鉄屑と非鉄金属(アルミ、真鍮、銅、ステンレス等)で、基本的に回収・買い取り・分別・圧縮までの作業を行う。現在は区の委託を受け、近隣町会の資源ゴミの回収も行っている。この事業所を通したアルミ缶の流通ルートは次のようなものである。S商会は買い取ったアルミ缶を圧縮し、この商会上トラックでやってくる複数の運びの業者で、最も高い値をつけるところに売る。その業者は、千葉県にあるアルミ缶の溶解・再生工場(再生地金メーカー)にそれを持ち込む。

橋のたもとのかなり大きい工場だが、古い。トタンがすすけ、会社名がすすけている。ガーガーと耳をつんざく機械のすれる音、硬いものをつぶす音が響きわたる。天井からつる

した巨大なまるい磁石が動き、カチカチ光るスクラップを無造作に押しつぶしては、鉄だけをくつつけて、右へと移動させる。または、山と積まれた缶に磁石が近寄り、スチール缶をくつつけて分ける。残ったアルミ缶はそのまま四角い型にぎゅっと押し込められて、出てきたときは、一メートル四方ぐらいの四角い固まりになっている。工場の中心に事務所がある。作業ズボンに白い長袖Tシャツをきたおやじさんに、話を聞く。「鉄はもう全然だめ。スチールは一トン持ち込まれるごとに逆に一、〇〇〇円もらってるくらいだよ。アルミは比較的值が安定している。アルミ缶の買い取りは一キロ七六円。アルミ缶は一日に二トン近く集まるかな。三〇年前はアルミは五〇〜六〇円だったが、昨年の夏は買い取りがキロ一〇〇円だった。ここ三、四年前頃から、リサイクルなんて言い出してから、アルミの値段があがった。キロ一〇〇円のころはホームレスらしき人の持ち込みはなかったのにねえ。六ヶ月前は二、三日に一回くる人も含めて平均して、五、六〇人のホームレスらしき人が来ていたが、今は三〇人くらい。遠くから自転車や大きい台車に積んで持ってくる。なんだかんだいって二、〇〇〇円から四、〇〇〇円は金が入るからね。新宿から一日二回自転車を持ってくる人がいる。飯田橋からも紙屋でリヤカーを借りて、義理があるから紙も集めるけど、アルミ缶もつぶして同時に集めて持ってくる人もいる。上野

からも夜中二時から集めて、ここに朝五時に持ってくる人がいる。ここは朝六時半から開けるので、待っているらしいよ。一週間に六日は持ってきて、一回に四、〇〇〇〜五、〇〇〇円もらって帰っている。ホームレスの人に、……橋が金に見えるって言う人がいた。」<sup>(22)</sup>

現金化する方法のふたつめとして、野宿をしている人々が集まっている場所をトラックで巡回してアルミ缶を買い取りにくる回収業者が数社あり、そこに売るというやり方がある。現在は圧倒的にこちらの方法がよく利用されている。例えば、もつとも買い取りを広範囲にやっているM商事は、埼玉県草加市の住宅街の中に小さな作業場をもち、やはりアルミ缶の回収・分別・圧縮までを行っている。近年設立された新しい業者である。仕事は、オーナーの初老の男性、彼の二〇代の甥、元野宿をしていた四〇歳前後の男性の三人でもにも担われている。この業者は二〇〇〇年の五月ごろから、キロ七〇円で買い取るといふピラを配って参入してきた。当時、持ち込みのS商會が約キロ六五円で買い取り、また野宿場所の近くまでやってくる別の業者がキロ四五円だったという状況に対して、M商事は野宿場所の近くまで買い取りに来て、しかも金額が高いということで、すぐクチコミで

広まっていったという。ここは社名入りのトラックで毎週、決まった曜日と時間帯に決まった場所を巡回して、野宿者が集めたアルミ缶を買い取っている。決まった買い取り場所は、墨田区で一六箇所、台東区で一〇箇所を含め、都内八区の約四〇箇所に広がっている<sup>(23)</sup>。「一日一トンのあがりでも二六、〇〇〇円にしかならない。せめて二トンは集めたいですよ。」<sup>(24)</sup>といい、野宿する人々が集まっている場所を東京中をめぐって探し、彼／彼女らの集住地をみつけると、そこでアルミ缶集めをするように話を持ちかけている。

M商事は、ときに野宿者にパンを配りながら自分のところに缶を持ち込むようにアピールしたり、集めた缶を入れるビニール袋を無償で提供したりと工夫をこらす。また野宿をしていた人を格安で雇い、回収を手伝わせたりもする。しかし、業者は手秤を使って集められた缶の重さを量るので、「キロをごまかされているのでは……」と野宿者の不信任感強い。また、業者自身も「ビニールを空けてみたら、空き缶のなかに石が入れられていて、重くなっていた」と不信任感を口にしている。しかし野宿者の集める缶をめぐって複数の業者が競合しており、集める側は業者の提示する買い取り値に敏感に反応し、より高いほうに持ち込もうとする。よって、結果的にはいえ

業者が競争することになり、買い取りの値段が落ちにくくなっている。

### 野宿者が働くことの困難

こうして、廃品回収・売買は野宿する人々の貴重な収入源としてある。しかも本に関しては、既存店ではあまり扱われていなかったが、新しく雑誌をメインとした露店を開くことで、より多くの売買が可能になった。その際、野宿している当事者が店を開くケースがあることは見逃せない。アルミ缶集めは資源の分別が課せられるようになったことから、より容易になったと思われる。それは本来ならば自治体および委託を受けた業者が回収してまわるはずのものを、いち早く野宿する人々が集めて売ってしまう。つまり都市社会の既存のシステムに食い込んで稼ぎをひねり出すのである。

しかし、このように「循環型社会」をめざし、リサイクルが推進される状況であるにもかかわらず、廃品回収が野宿している人々の生活の糧となつていくがゆえに、いつそうの締め付けがあるようにみえる。

まず、空き缶や雑誌が集めにくくなるなど、収集への具体的な規制がある。例えば、駅のゴミ箱は南京錠やカギ穴がついたものが増加した。電車の中では車掌がこま



めに網棚やイスの雑誌・新聞を回収するようになった。アルミ缶も同様で、「資源の持ち去りを禁止する」という内容の張り紙が回収カゴに頻繁に張られるようになったり、地域住民が行政の回収車が来る直前に缶を出すようになったりと、野宿する人々は収集が困難になってきた。例えば台東区では、「野宿者が廃品回収の空き缶を抜き取るため、住民が迷惑をしている」と「空き缶抜き取り防止対策」案がまとめられるなどした<sup>25)</sup>。アルミ缶集めに多くの野宿者が参入するようになって、競争が激しくなったことももちろんあるが、町会単位で締め出しの申し合わせができてはじめており、収集に影響が出ている。

次に、買い取りを行う業者への規制もみられた。例えば、本の露店は頻繁に警察の手入れを受けていた。そして実際に一九九七年、じよっちゃん、店番の人を含め五人が「道路交通法違反」の疑いで逮捕された。また、アルミ缶を買い取っていたS商会は、しばらくしてからアルミ缶の買い取りのみをやめてしまった。というのも、区のリサイクルの委託を受ける組合があり、S商会もそれに加入している。その組合から苦情があったというところで、行政から呼び出しを受けた。つまり、区から委託を受けて仕事をする場合に、回収したもののなかにはスチール缶もアルミ缶も混じっていて、それを分けること

自体も手間になるはずなのに、S商会は「ホームレス」からアルミ缶だけを買って、得をしている。しかも他の業者が回収する時にはスチール缶ばかりが残っていて不公平である。よって「ホームレス」からの買い取りをやめよ、さもなくば組合をやめよ、という話であった。S商会のほうでは、区の委託をはずされたというのはまずいので、買い取りはやめざるをえなかったという<sup>26)</sup>。

さらに、直接的な規制ではないが、東京都の野宿者への「自立支援」のあり方にすけてみえる問題性もある。例えば東京都は「ホームレス」への具体的な「自立支援」政策の一部として、「心身が健康で就労意欲があり、自立が見込まれる者」は「就労自立」によって、「行政的部分的な支援を得ながら、就労をめざす者」は「半福祉・半就労」によって、それぞれ「社会生活への復帰」を目指すという<sup>27)</sup>。ここでいうところの「就労」はもちろん、「フォーマル」な労働市場における正規の賃労働であり、路上での生業は全く想定されていない。

以上のように、野宿者が行う廃品回収に対しては、収集できなくする、店に規制をかけて商売そのものを成り立たなくする、などの締めつけが存在した。それには、電車の不審物を取り除くため、駅売店の雑誌の売り上げ

に響くから、ゴミ箱周辺が汚されるから、許可なく露店を開いたから、資源の泥棒だから、同じ業者として不公平だから、などとさまざまな理由がいわれており、それも一面は事実かもしれない。しかしその根底には、野宿する人々が路上で生業として行うことへの反発が強く存在するように思える。

## 五 おわりに

以上のように、グローバル都市・東京にて野宿する人々は、都市社会を利用しつつ廃品回収・売買にかかわり、またさまざまな規制を受けていた。廃品回収業に焦点を当てつつ、都市下層の人々をめぐるそのような機会と制約（特定の対象への差別を含む）の歴史的展開を明らかにすることが今後の課題である。

\*本稿の初出は、山口恵子（二〇〇二）「現代社会における都市雑業の展開―新宿、隅田川周辺地域の事例より―」『広島修大論集』四二―二であり、加筆・訂正を行ったものである。

(1) この実態調査は、二〇〇二年制定の「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」において義務づけ

られたもので、二〇〇三年に日本全国の市区町村において「ホームレス」の概数調査と生活実態調査が行われた。この概数調査のデータは考えうる最小限の数であることはいうまでもない。

(2) 使用する事例などのデータは、東京都でも多くの人々が野宿をしている西部の新宿駅周辺と、東部の日雇労働市場である「山谷」および隅田川周辺における一九九六年から継続している調査にもとづいている。ときに支援団体の一員として、ときにそれから離れて、質的および量的調査を行った。文中に用いる人名などの固有名詞はあらかじめ仮名になっている。会話の鍵括弧の中に括弧が入っているのは、特別の留保がない限り、話を分かりやすくするためにこちらで補った言葉や説明であり、「……」は人名以外の固有名詞で、匿名化したものである。

(3) この調査は、「ホームレス」が社会問題化されはじめて一九九四年度からはほぼ年に二回、二月と八月に、都区部において行われている。資料は東京都より入手。

(4) ただし、著しく増加した施設の多くは同じ経営体であり、基本的に対象者に生活保護を受給させ、そこから生活費を差し引くことで経営がなりたっている。一部屋に数人を詰め込むなど生活環境が劣悪であること

などから、問題視されている。

- (5) 山谷労働者福祉会館活動委員会編集・発行ニュースレター、「山谷から」八二、二〇〇〇年九月二三日発行、四頁。

- (6) 「常設」タイプとはいえ、一年中家を動かさずに確保できる場所のごく少ない。例えばこの隅田川の河川敷においては、行政による「清掃」という名の一時撤去がある。毎月一回は家を移動させねばならないことが、野宿者にとっては大きな生活上の負担となっている。

- (7) 新宿連絡会HP「新宿区及び周辺の路上生活者概数」  
<http://www.tokyohomeless.com/> (二〇〇三年八月一日ダウンロード)。

- (8) 都市生活研究会編集・発行 (二〇〇〇) 『平成一一年度路上生活者実態調査』。

- (9) この調査は、一九九九年の年末に山谷、上野地区(一部隅田川べりも含む)にて、主に当事者・支援者団体による食事の「炊き出し」に集まる野宿者を対象として行った。ここにあげた回答では、ケース単位で全く同じ回答はこちらで選択してひとつしかあげていないなど、回答数は考慮していない。詳細は、田巻松雄・山口恵子(二〇〇〇)「野宿層増大の背景と寄せ場

の変容―「山谷・上野調査」からみる飯場労働の実態―」『寄せ場』一三二などを参照。

- (10) 「山谷・上野調査」回答者の覚書より(男性、五二歳、隅田川べりで野宿、野宿歴約一年半)。

- (11) 東京都環境局廃棄物対策部計画課(二〇〇三)『東京リサイクルハンドブック二〇〇三』東京都生活文化局広報広聴部広聴管理課。

- (12) 東京市社会局(一九三五)「紙屑拾ひ(バタヤ)調査」『日本近代都市社会調査資料集成―東京市社会局調査報告書「大正九年〜昭和一四年」』SBB出版会。

- (13) 本集めの仕事の諸相については、拙著(一九九九)「見えない街の可能性」青木秀男編著「場所をあける!―寄せ場/ホームレスの社会学―」松籟社参照。

- (14) 一九九六年八月二六日聞き取り(山下さん、男性、五二歳、新宿駅地下街で野宿、野宿歴約六年)。

- (15) 一九九六年八月二六日聞き取り(前掲、山下さん)。

- (16) 一九九六年九月三〇日聞き取り(前掲、山下さん)。

- (17) 二〇〇一年五月五日聞き取り(浜本さん、男性、三六歳、新宿付近の公園で野宿、野宿歴約三年)。

- (18) 一九九六年九月七日聞き取り(じよっちゃん、男性、四五歳くらい、新宿駅地下街で野宿)。

- (19) 東京都清掃局(一九九四)『資源回収業者育成・支援

策調査報告書」八一―九頁。

(20) 東京都清掃局(一九九三)「資源回収業者育成・支援  
方策調査報告書」四五頁。

(21) 二〇〇〇年二月五日聞き取り(いっちゃん、男性、  
六〇歳くらい、隅田川べりで野宿、野宿歴約二年)。

(22) S商会にて二〇〇〇年八月二九日聞き取り。

(23) 業者の作成した地図より買い取り場所をカウントし  
た。

(24) M商事にて二〇〇〇年一月五日聞き取り。

(25) 野宿者人権資料センター(二〇〇二)「シエルタレス」  
一二、六八―六九頁。

(26) 前掲S商会にて二〇〇〇年九月二五日聞き取り。

(27) 東京都福祉局(二〇〇一)「東京のホームレス―自立  
への新たなシステムの構築に向けて―」三九―四四頁。

